
がらくた小部屋

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がらくた小部屋

【Nコード】

N0337E

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

小さな小部屋に眠るのは、小さなお話。ちょっぴり怖かったり、キモチが悪かったり。不気味だったり。

いらっしゃいませ

こんばんわ。こんにちは。初めまして、久しぶり。

ようこそ、がらくた小部屋へ。

ここはね……怖いかもしれないお話たちの部屋だよ。

だから、怖くないってこともあるかもね。

長いお話じゃなくてね、簡単に読めるようなお話があるよ。

ああ、怖いよりは キモチワルイ かもしれない。

短編集って考えればいいのかも。 徐々に増えていくお話たち。

くすくす……ねえ、あなたはどつするの？

回れ右して帰る？ それとも、奥にある話を見ていく？

怖い話、不気味な話、ぐろてすくな話。

そついうお話が好きな人は……見てつてもいいよ？

どちらにしても さようなら。

また会いましょうね？

濁っていたのは

暗い底無しの夢を見ていた。

何処なのか解らない暗闇の中に、ぼつりという自分。

自分の他には誰もいない。

光も見えず、生きているモノの気配は自分だけ。

ここは何処で、如何して自分はここにいいのかを考える。

記憶に残るのは……酷く曖昧な感情。

とても楽しいことをして、すごく悲しいことがあった。

それだけはたしかだった。

「晃平ーもう起きたらあ？ 太陽昇ってるよー」

パチリ、と瞼を開くと、そこには愛しい夕霞の顔があった。

おはようと寝ぼけた声で挨拶を試みる。

「もー寝ぼけすぎだよ。せつかく私の誕生日なのに。あははは」

ちよつと待て。夕霞の誕生日は明日だったはずだ。

けらけらと笑う本人が間違えるとは何事。

「夕霞、お前の誕生日は明日だぞ」

「明日も今日も同じだよ。いいじゃない、今日で」

「そんな曖昧でいいのか……」

「いいから。好きなもの買ってくれるんでしょう」

夕霞の好きなもの。それはつまり。

「リアルな人体模型とかは買わないぞ」

「人体模型？ 晃平がいるからいらないよ」

「それはどういう意味だ」

「そうじゃなくてね、ホルマリン……」

「却下」

華奢な身体にかわいい顔をしている夕霞。性格もいいのに、唯一

の欠点がある。

それは、変なモノが好きということ。

ホルマリン漬けとか、解剖した奴とか。

リアルな目玉の玩具とか。

さわるとぶよぶよしていて、気持ちいい。

「何よう。晃平だつて、にやにやしなから買つてるじゃない、解剖セット」

「ホルマリンよりはいいだろ、解剖の方が。それにセットじゃない、キットだ」

「どうせなら、ばらばらにしたのでホルマリン漬け作ってくれればいいのに」

どこまでも話が続きそうなのは気のせいなのだろうか。

とりあえず、起きた方がいいと思う。

ベッドの横に置いてある眼鏡を手にとって、掛けようとして、止まった。

レンズが白く汚れている。なんだ、また夕霞が何かしたのか。

とりあえずベッドの掛け布団で拭ってから装着する。

ちよつと白いけどなんとか見える。大丈夫だろう。

寝起きの顔やら頭やらを整えて、外に出たのは午後三時過ぎ。

それから、欲しいものがあるからと引きずられた。

あちらこちらの妙な店へと連れ回されてかなり疲れた。

かれこれ三時間くらいは経っている気がする。

夕霞が持っている紙袋には、割れないように丁寧に包まれた、様々なホルマリン漬け。

ホルマリン漬けを作るセット。

まずはここから、と書いてある解剖キット。

持たされている紙袋には、新鮮な蛙と小鳥。

最近錆びてしまったから、代わりのナイフ。解剖キットはもう必

要ない。

ナイフひとつで十分バラせる。予備にいくつか買ったけども。

「随分暗くなってるな……夕食どうする？」

「夕食かぁ……部屋に戻ってからでいいと思うよ。」

「作るのか？」

「作らなくても、あるよ。」

家に何か食材あっただろうか。まさかホルマリン漬けじゃあるまいだろうな。

漬かってないものならともかく、薬品漬けはまずいと思う。

「あ、新鮮だから大丈夫だよ？」

何を食べるんだろうか。

奇妙な夕霞と自分。

解剖されたモノが好きな夕霞と、解剖するのが好きな自分。

ウェブのサイトで出会って、同棲した。

猫や、蛙や、ネズミ。

ばらばらになった姿を、横で眺める夕霞。

すっかり太い血管を勢いよく切断してしまって、血液が噴出したとき。

間近で見ていた夕霞の白い頬に跳ねて。

どうしようかと考えていたら。

興味津々な表情で、返り血をぺろりと舐めた。

そしてまた解剖を眺めていた。

あとで、美味しかったと言っていた。

個人的には、ネズミより蛙の方が自分は好きだけど。

ある日バイトから帰ってくると、部屋の中で血まみれになっている夕霞がいた。

よりもよって、ベッドの上で。

夕霞の周りには、ガラスと薬品が飛び散っていて。

どうやら、ガラスのホルマリン漬けを握り潰したらしい。
素手で潰すとは、すごい力だと感心した。

潰したら、どうなるかなって思ったんだ

そういつて、微笑んだ血濡れの夕霞

ガラスで切ったのかと思っていた血は、ホルマリン漬けのものだった。

中身を潰したら、ぐにやりという柔らかい感触と共に血が流れ出したらしい。

鮮血とも、酸化した血液とも違う、薬品漬けの赤色。

それはとても不思議な色だった。

「ねえ、晃平」

「何だ？」

「今日誕生日だよね？」

「正確には明日だけだな」

「お願いがあるんだけど……いい？」

「まあ、誕生日だからいいか」

何をねだるのだろうか。また解剖を見せてくれというのだろうか。というか今まで買ったホルマリン漬けは、お願いには含まれていないのか？

どんなお願いなのか、楽しみだ。

「あのね……さっそくキット使ってみたいの。その後、夕食にしようよ」

そういつて、にっこり微笑む彼女。

ああ、なんだ。そんなことか。

「いいぞ　ちようと試し切りをしたかった所だから」

夕食は何にしようか。

薄暗い部屋の中で白く浮かぶ身体。

夕霞は、こちらに手を伸ばして、服を脱がそうとしている。
服を脱がしながら聞かれた。

「ね、どこなら切っていい？」

「どこでもいいぞ。どこでもいいか？」

「どこでもいいよ。晃平ならどこだってあげるよ」
くすくすと幼い少女のように笑う。

そして脱がしざまに、すうっと腕をナイフで撫でていく。
ひやりと冷たい感覚が残る。

その次に、今とは反対の左腕を浅く切り裂かれた。

桃色の傷口から滴る血を、赤く扇情的な舌で舐めとる夕霞。
とても、綺麗だと思った。

腕を伸ばし、むき出しの乳房へとナイフを滑らせる。

抉るようにして肉を切り取り、口に含む。

お馴染みのすこし苦い血の味と、ほのかに甘い脂肪の味。

小さく赤い、抉られた傷口に、白い乳房。

再び抉ろうかとしている腕に夕霞が噛み付く。

ほんの少しの肉を抉って離れる小ぶりの唇。

「……どうだ？ 夕食の味は？」

「ん。初めてだけど、サイコー」

「ならよかった」

「ねえ、お願いがあるんだけど」

「まだ何かあるのか？」

「これが終わったら……私を殺して？」

「何故？ もう飽きたのか？」

「違うよ。晃平に飽きたんじゃない。生きてることに飽きたの」

「死んでどうする？ また飽きるかもしれないぞ」

「そうしたら、その時に考えるよ。今日ここで、晃平に殺されたい」

「これが、終わったらな」

「うん　ありがと」

「どういたしまして」

なんだか不思議な夢を見ていた気がする。

なんだか凄く悲しい夢を見ていた気がする。

なんだか凄く懐かしい夢を見ていた気がする。

黒い闇以外に何も見えないはずの空間の中。

立っているのか座っているのかわからない自分。

そんな自分の隣を見してみる。

ゴロリトコロガル　夕霞の死体。真っ赤な血液。

腹部にはぽっかりと黒い穴が開いている。

内臓は、抜いてホルマリン漬けに。

肉は、すべて美味しくいただいた。

残っているのは、干からびた骨ばかり。

そう、約束どうりに夕霞を殺した。

そしてその後、自殺した。

気が付くと、この場所だった。

夕霞の死体はあるのに……ホルマリン漬けはない。

一体何処に忘れてきてしまったのだろう。大事なモノなのに。

「誕生日……おめでとう」

抜け殻に言葉を落とす。

何日……時間があるのかすらわからないけれども、
まだ、夕霞の味は覚えているよ。

干からびた死体をよく見る。

酸化しているのはずの血液。

赤い……赤い血液。

どうにも白く靄が掛かって、見えづらい。

眼鏡を外そうとして……止まる。

ふと思いついて、自分の顔へと手を伸ばす。

指先で、眼球を抉りだして見た。

痛みは……ない。

残った目玉で、取り出した眼球を見てみる。

ああ、なんだ。

汚れていたのは、眼球じゃないか。

ある子供の日記

今日はお天気がとってもよくて、気持ちよかったです。

新しい小学校でとても緊張したけれど、楽しかったです。

お父さんとお母さんは、僕を先生の所へ連れて行ったあと、何か話をしていました。

お父さんもお母さんもうれしそうにしていました。

先生もやさしそうな人でした。

僕は違う学校から転校してきました。

大人の事情があるんだって。

前の学校のお友達、元気にしてるかな。

ほんとうは、転校なんてしたくなかったけど、仕方ないよね。

わがまま言ったら、きつとお父さんやお母さんが悲しむよね。

だから、これは僕だけの秘密。

あんまり遅くまで起きてると怒られちゃうかも。

これでもお母さんはきびしいんだ。

ティネイに話さないって。

もう寝ます、おやすみ。

今日はたくさんお友達が来ました。

女の子も男の子もいっしょに。すごくうれしかったです。

お勉強も、知らないことばかりで楽しいです。わくわくします。

いっしょに校庭へ出て遊ぶのも楽しいです。

皆でいっしょに食べる給食も楽しいです。

もしかしたら、お母さんの料理よりもおいしいかもしれないと思いました。

そういったらお母さん怒るかな。

今日の朝ごはんは、野菜サラダとベーコンエッグでした。
とってもおいしかったです。
でもお母さんとお父さんはちょっと疲れてるみたいです。
昨日いっしょに学校へ行ってくれたからかな。
それともお仕事大変なのかな。
頑張ってね、お父さん。
僕、オウエンしてるから。

今日は学校がお休みの日でした。
お母さんは昼間買い物に行きました。
僕は連れて行ってもらえませんでした。
お菓子をたくさん買うから駄目なんだって。
ちゃんとお勉強もしたのに、何だか退屈でした。
一回だけ、玄関のチャイムが鳴りました。
お母さんかお父さんが帰ってきたのかと思って開けました。
知らないおじさんが立っていました。
お父さんかお母さんはいるかい？ と聞かれたので、いません、
と答えました。
そうしたらおじさんは、じゃあこの事をお母さんに伝えてくれる
かい？ と言いました。
はい、と僕は元気よく返事をしました。
そしておじさんは帰っていきました。
これでいいんだよね。
ちゃんと僕レイギ正しくできたよ、お母さん、お父さん。

今日も日曜日で学校はお休み。
お父さんは今日も会社でお仕事でした。

お母さんはのりを使っていました。

昨日、おじさんが来たことを教えたら、とっても怖い顔をしました。

そしてどこかに電話を掛けて、しばらくしたらのりを使っていました。

フウトウを作っている、ないしょくというお仕事らしいです。

お母さんも、お父さんもお仕事大変です。

僕は僕のお仕事頑張るね。

子供は勉強がお仕事だって前に言ってたよね。

ちゃんとお家でも学校でも勉強頑張ってるよ。

今日の晩御飯は、お味噌汁と焼き魚と煮物でした。

ちよっぴり、魚のしっぽがコゲていました。

少しだけ苦かったです。でも、我慢して食べました。

今日は久しぶりの日記です。

今日の朝ごはんはトースト一枚でした。

少し足りなかったです。

最近、お母さんとお父さんはよくため息をついています。

お仕事が大変みたいです。

僕がテストで満点を取ったのに、紙を見せても褒めてくれませんでした。

ちよっとお母さんのキゲンが悪いみたいです。

ゆっくり休んでもらいたいなと思いました。

そつだ、今度お母さんの方をたたいてあげようと思います。

そしたらまたいつもの元気に笑うお母さんに戻るよね。

お父さんも疲れているみたいです。

でも、お仕事から帰ってくると、僕の頭を大きな手でなでてくれます。

とってもうれしいです。

僕はもうそろそろ寝ようかな。

僕よりもお父さん達の方が遅く起きているみたいです。
うつすらと廊下のドアから明かりが見えるからです。

おやすみなさい。

今日はとっても怖いです。

お母さんとお父さんが怖いです。

一日中ケンカしているみたいです。

どなり声が僕の部屋にまで響いてきます。

朝も、昼間も、夜も。今も。

とっても怖いです、恐ろしいです。

そんなにお仕事大変なのかな。

そんなに疲れているのかな。

僕に何ができるのかな。

出来ることはあるのかな。

早く仲直りして欲しいです。

今日はほっぺが痛いです。

ドアの間からケンカをのぞいていたら、お母さんにぶたれました。
お母さんの手の後がついて、真っ赤になって、ひりひりして痛い
です。

さっきお父さんが冷たいタオルを持ってきてくれました。

ありがとう、お父さん。

でも、なんだかケンカはすごいことになっているみたいです。

僕が寝ようとしてふとんに入った後も、食器が割れる音が聞こえ
ます。

色んなものを投げているみたいな音。

そんな音は、怖いです。

真っ暗な部屋で大きな音が聞こえると、びくっとしてしまいます。

僕は最近朝も昼間も学校にいるときも眠いです。
でも、寝たら先生に怒られるから、眠るのはガマンします。

朝起きたら、今日はお父さんが朝ごはんを作っていました。

お母さんも今日からお仕事に行くらしいです。

今日の朝ごはんは、目玉焼きとトーストでした。

おいしかったです。

それからお父さんはお仕事へ行きました。

僕は学校へ行きました。

学校から帰ると、お父さんが先に帰っていました。

お母さんはまだ帰っていませんでした。

いつ帰るの？ とお父さんに聞いたら、お母さんはまだ帰らない
よといわれました。

なんでも、シュツチョウなんだって。遠いところでお仕事してい
るらしいです。

お母さん、おつかれさま。

僕は、元気だよ。

今日の晩御飯には、久しぶりにお肉が出ました。

とってもおいしかったです。

今日もお母さんは帰ってきませんでした。

お父さんは帰ってきました。

すごく疲れた顔をしていたけれど、僕に笑いかけくれました。
うれしかったです。

それから、僕の頭に手を乗せてこういいました。

明日、もしかしたら怖い人がくるかもしれないけれど、部屋に隠
れていなさいって。

お父さんは少しいなくなるけれど、ご飯は冷蔵庫の中に入ってる

から、食べなさいって。

なんだかよくわからないけれど、僕はうなずきました。

僕はいい子だから、お父さんやお母さんのいうことはちゃんと聞くんだ。

今日の晩御飯は、とても豪華でした。

お肉に、焼き魚に、デザートケーキまでありました。

とってもおいしかったです。

今日はお休みの日です。僕は言われたとおりに部屋に隠れていました。

ベッドの下に隠れなさいといわれてたけど、狭くて入れませんでした。

変わりに、洋服を入れるタンスの中に入ってカギを掛けました。

怖い人には会いたくないからです。

しばらくすると、お父さんのいる部屋の方から大きな物音がしました。

大きななり声もしました。

まるでお父さんとお母さんがケンカしているみたいな。

しばらく大きな音は続きました。

僕はとっても怖くて、タンスの中でがたがた震えていました。

そして、気づいたら眠っていました。

眼が覚めたときは夜でした。

お父さんの部屋に行ってみたけれど、誰もいませんでした。

本とか、書類とかが床に散らばっていました。

赤い斑点模様のカーペットが敷いてありました。

ちよっとお魚のにおいがしました。

僕は一人でご飯を食べて、お風呂に入って眠りました。

あれからずっと学校へ行つてません。

お父さんもお母さんもまだ帰ってきません。

学校の先生が何度か来たけど、ムシしました。

お母さんやお父さんが帰ってくるのを待っているからです。

そんなにお仕事大変なのかな。

そんなにシュツチヨウは大変なのかな。

ちよつとだけ心配です。

ちよつとだけ不安です。

ちよつとだけワケがわからない怖さがあります。

でも、僕は待っているからね。

僕はいい子だから、ちゃんと待ってるんだ。

お母さん、お父さん、僕は元気です。

今日はちよつと困ったことが起こりました。

冷蔵庫のごはんがなくなっていました。

どうすればいいのでしょうか。どうしたらいいのかな。

僕はお金がどこにあるのか知らないです。

でもお父さんやお母さんはいないです。

僕は、自分のお小遣いでお菓子を買いに行きました。

たくさん買ったけど、食べるのは少しです。

いつ帰ってくるのかわからないからです。

起きているとおなかがすくので、もう寝ます。

お菓子がなくなりました。

もう食べるものがないです。

でも水があります。

水があれば大丈夫だと思います。

お腹がすかすかしているけれど、もう寝ます。

僕はベッドのなかで書いています。
起き上がるのがめんどうだからです。
一ヶ月くらいするけど、まだ二人は帰ってきません。
いつになったら帰ってくるのかな。
僕、ちよつとつかれてきました。
待っているのにつかれました。
もしかしたら、待てないかもしれない。
その時はごめんなさい。

じつと自分の指を見えています。
僕の身体は細くなつていくのに、まんまるな指です。
僕はあまりにお腹が空きすぎたので、ちよつとだけかじってみました。
した。

少し痛くて、怖かったです。でも。

赤い血が出て、甘かったです。チョコレートを食べているみたい
でした。

かじった指は、おいしいお肉と同じ味がしました。

とってもおいしいお肉でした。

お母さん、お父さん、僕はなんとか生きてます。

早く帰ってきてね。食べ物がなくなる前に。

早く帰ってこないと、僕がいなくなっちゃうよ。

ほら、もう三本指がない。

好むもの

私は傷口が好きだ。

突然なんだと思うかもしれないが、好きなのだから仕方が無い。

刃物によって切り裂かれた傷口。

馬鹿力でちぎり取られた傷口。

少し膿んでしまった傷口。

そしてどんな傷口からも共通して覗く血液もまた美しいと思う。
膿と血が混ざり合い生まれるグラデーシオンは最高だ。

おっと、話が血液へとそれてしまったね。

修正することしよう。

鋭利なものによって作られた傷口は、断面がとても滑らかでいい。
綺麗に切り裂かれているため、淡い桃色をした組織が良く見える。
じんわりと珠が浮かぶように、血液が滲み出してくる様などいい。
引っかかり傷のように、うっすらとした傷口もいい。

血を透かし見た向こうに、組織が見える。

思わず傷口を拡大させたくなくなってしまふ。

無理やり力によって作られた傷口も好きだ。

刃物などと違い、ぐちゃぐちゃに潰れた傷口。

思わぬ深い部分にまで達した傷口は吸い込まれそうに美しい。

たまに指一本分くらいは入りそうな傷口もある。

でこぼことした組織に、赤黒い血がこびりついている。

開けば、黒に赤が重なる。

余談だが、私は包帯も好きだ。

白く清潔な包帯に、ツンとした匂いの消毒薬を塗りたくる。酸味の強い香りのする傷口に巻き付ける。

とても素晴らしい組み合わせだと思う。

それに、施した包帯からじんわりと血液が滲んでいると、たまらなくなる。

張り付いた包帯を無理やり剥がし、治りのかけの傷口をこじ開けてやりたくなる。

新鮮で甘い血液の香りが漂うのだろう。

体液が滲んだ包帯も、またいい。

傷口は、包帯などで隠さずに、見せるべきモノだと私は考えている。

ぎざぎざ、つるつる、ごつごつ、ざらざら、ぶよぶよ。

どの傷口もすばらしい芸術的作品だ。

しかし、私は傷口を見るのが好きなのだ。

痛みが好きというわけではないのだ。

これには非常に困っている。

傷口を得るためには、痛みが必要不可欠だからだ。

痛みの無い傷口などは存在しない。

見えない傷口は存在するが。

美しい傷口が見たくとも、痛みが恐ろしくて傷口を作ることができない。

麻酔でも掛けて作ろうかとも考えたのだが、それはよろしくない。神経が麻痺し、ぼんやりとした状態で傷口を見たとしても、靨がかかってしまうからだ。

しっかりと覚醒した状態で傷口は鑑賞するものなのだ。

結果的に、他人の傷口を鑑賞するばかりとなってしまうた。幸いなことに、傷みが好きな友人が私にはいる。

その友人に頼み、傷をつけさせてもらっている。

私は傷口を見ることができ、友人は痛みを得ることができる。ベストな関係だと思っている。

ただ、少しだけ戸惑ってしまうことがある。

最近友人の希望が過激になってきているのだ。

首を絞めて欲しい、骨を折って欲しいなどと。

打撲や、骨折などは傷口が見えないから好まない。

首も、絞めたとしても傷口が出来るわけではない。

絞めた指の跡が、赤黒く付くだけだ。

友人には少し落ち着いてもらわなければならない。

神経が麻痺してしまつては、死んでしまつては、痛みを感じることはできないのだと。

傷口が好きな私は、一時は外科医になろうかと考えていた。

頭は特に悪くは無く、むしろいい方だった。

努力次第でなんとかかなりそうだった。

しかし、これはやめることにした。

毎回手術の際に傷口を眺めていたら、その間に患者が死亡してしまいそうだからだ。

医者に来るということは、小規模の傷ではなく大規模となる。

あまり眺めていると出血多量やら、ショック症状やらでいちころだろう。

傷口は好きだが、殺人は好きではない。

痛みもまたしかり。

紆余曲折あつて、私は今カウンセラーの仕事をしている。

これはとても充実していて、よい仕事だと思っている。

え？ 何故カウンセラーなのかつて？

ここまで話を聞いた君ならわかるだろう？

心の傷口を見ることができからな。

とらなければよかった

今朝起きたら、左目がゴロゴロしていた。

ゴロゴロといっても、異物感を感じるというわけではなかった。どことなく、目が痛むような……ヒリヒリするようなそんな感じだった。

物を見るのに支障はないけれど、大事な部分だけにやけに気になっってしまう。

鏡を片手に格闘してみる。

瞼をつまんで、持ち上げてみたり。

ガラスの入れ物に、水を張ってその中で瞬きしてみたり。毎回花粉症の時に世話になっている目薬も差してみた。ちよっぴり沁みただけだった。

……なかなか手ごわいゴミだ。

パチパチと忙しく瞬きを繰り返しながら窓の外を見ると、もう日が昇っていた。

まだ暗い時間帯に起きたはずなのに　　どうやら目のゴミを取るのに必死だったらしい。

今日が休日によかった。

こういうものは、放っておけば自然に取れるというようなことを聞いたことがある。

とりあえずお昼ごはんにしよう。

そう思いながら、冷蔵庫を開けてみる。

三十過ぎで、一人暮らしの男の冷蔵庫は、からっぽだった。

結局お昼は外食で済ませた。

確かに最近自炊はしていなかったが、まさか何もないとは思わなかった。

しかも、わずかに残っていた調味料の賞味期限が、五年も過ぎているとは何事だ。

これで体は健康そのものなのだからすごいと思う。

ネットサーフィンでもするかと、ノートパソコンを開いているのだが……

どうにも見えにくい。

さっきの外食でもそうだったが、視界がぼやけはじめている。

メニューを見て、すっかりとんでもなく高い物を注文してしまうところだったのだ。

ぼやけて、ぶれているから、ゼロが増えたり減ったり。

危ないこと、この上ない。

そんな状態なので、歩きかたもふらふらしている。

何度車に轢かれそうになったことか。

外食なんてするべきじゃなかったのかもしれない。

それにしても……眼が痛い。

痛い上に、ぼやける。

かなり不便だ。

見えないわけではないが、見えにくい。

ある意味見えないよりも厄介かもしれない。

眼科へ行くべきなのか……？ いや、ただのゴミぐらいだったら、恥ずかしい。

しかし、これ以上ぼやけても困る。明日は仕事なのだから。

何か役に立つものはないかと、救急箱を漁ってみる。

古びて、ちよつと黄ばんだ絆創膏。

おなじみのうがい薬。
半端な長さの包帯。
ラベルの剥がれた軟膏。

…… まともに使えそうなものがない。
軟膏なんか、もはやどこに塗る薬なのかすらわからない。
液体の薬はないのか、液体。

若干うんざりしながら、テーブルの上を見ると
そこには、ひとつの洗眼薬。
コンタクトレンズ用のやつらしいが……なぜあるのか。
眼鏡もコンタクトも着用してはいないのだが。
箱を見ると。

『強力洗浄。レンズにこびりついた汚れも浮かせて落とします!』

そう書いてあった。

しぶといゴミでも、この薬ならば取れるかもしれない。
さすがに明日もこの状態では、仕事に支障がでしまう。
薬をもって、洗面所へ行く。

専用の容器に薬を注ぎ、眼のところへと持っていく。
容器越しに見ると、かなりぼやけて見える。
顔を仰向けにして、容器の中で瞬きを繰り返す。

一回、二回、三回……四回。

ハツカとかミントが入っているのかは知らないが、スーッと
気持ちいいかもしれない。

十回くらい瞬きをしたところで、容器を離す。
いい加減にゴミは取れただろう。

液体の入った容器を見ると、一円玉くらいの丸い黒いゴミ。

……デカッ。

ふと気づく。ゴミは取れたはずなのに、まだ視界がぼやけている。薬がまだ沁みているのだろうか。

ぼけぼけの視界のまま、洗面所に付属している鏡で自分の眼を見ている。

夢でも見てるんだろうか。

そこには、何もなかった。

あるべきはずのものが、なかった。

鏡に映った真っ白な瞳。

そう　黒目がなかった。

自分の手から、容器が音を立てて滑り落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0337e/>

がらくた小部屋

2010年11月20日02時57分発行